普及活動の教育的方法

金　築　忠　雄

Tadao KANETSUKU

Educational Methods of Extension Work

普及事業は，戦後の農業生産基盤の極端な荒廃のなかで，その活動方法についての検討もないままに，専ら普及関係者の模索と創意によって，さまざまな活動が展開されてきた。それは最悪の条件下での暗中模索であったといえよう。そして，模索の末に今更のように気づいた方法の原理が「教育的」ということであったと解することができないだろうか。教育的とは，前回の小論で述べたように，人間の自覚性に即していくということであった。すなわち，農業政策を背景とし技術を中心として行なわれる教育活動である普及事業は，技術において自己を形成的に自覚する教育活動にほかならないと考えた。このように解される普及活動の教育的方法は，具体的にはどんなかたちになるだろうか。前回の小論において認めた原理の具体化された方法とはどのようなものかに答えたいというのが本論の意図するところである。

1．科学技術教育としての普及活動

普及事業の背後には農業政策がある。その農業政策をひき出すのは農業にビジョンを与える農政であろう。農業に関する科学も技術も，そのビジョンに動機づけられ，その目的に寄与することをめざしている。この連関は逆の方向から考えることもできる。すなわち，技術や科学の成果が農業のビジョンを創り出すのである。ビジョンに導かれて技術が生まれ，技術に媒介されてより高度のビジョンが描かれる。このような技術において自己を形成的に自覚する教育的な普及活動とはどのようなことであろうか。

高度化する技術，飽くことを知らぬ企業の利潤追求は人間にただ追随することを，ただ順応することを要求し，人間の自主的在り方を危殆に陥いれようとする。そのような人間疎外の状況を打破し，人間の主体性，尊厳性を確保することなくして教育的な普及活動はあり得ない。この問題はひとつには体制

に関する問題でもあり，その限りでは政治の分野に属する事柄であろう。しかしただ体制の問題であると片付けるわけにはいかない。それは，自主的精神の問題と考えられ，すぐれて教育に関する事柄であると思われる。自主的精神を失わぬ教育的普及活動とは，今日的な表現をすれば，民主的方法，民主的手続きを経て，知識・技能が学習され，態度が養われることだといってよかろう。さらに科学的知識や技術そのものが民主的性格をもつことであるともいえるであろう。科学や技術が民主的性格をもつことによって，それらを中心として行う普及活動が民主的になり，従って教育的になると考えられるからである。そのような性格を有する科学の，民主的方法による教育が，教育的な普及活動ということになろう。

一般に科学教育とはどんなことを意味しているであろうか。それは，「筋道[2]をたてて雑多な物事を処理していく態度」をつくることである。偏見や物真似しかやらないという態度をあらため，問題や困難に際してはますます知的好奇心をさかんにし，その問題の処理を因果の関係において処理しようとし，直接にそのものを観察し，冷静にこれを分析し，しかも数量的に合理的処理をしようという生活態度をつくることだと考えられる。科学教育とは，科学の専門的概念や法則を直接教えこむことではなく，日常に経験する諸般の事柄を科学的に扱う方法を体得すること，科学的知識を構成する方法を体得することである。科学が自然を認識するときに用いる実験という方法は，事実を受動的に集めているのではない。実験するまえに既に「仮設」として一つの観念があり，その観念に基づいて現象をつくり出して「観察」しているのである。普及活動においても，このような意味での科学技術教育が行なわれねばならない。複雑な非民主的な人間関係が真実を求めようとする意欲を殺ぎ，合理的な実践を阻むことがあってはならない。自主性のない人間関係のなかで，従順なハイハイ農家になるようにおいこめても，またおいこまれてもならないだろう。

さて，このような科学的態度に貫かれた技術指導が実を結ぶためには，普及員の能力・人柄，地域の人々との人間関係，その背景にある政治的・経済的および社会的な要因が有効に働かねばならぬ。かつての普及員[3]の業績評価は，専ら農業生産のための技術から割り出されたものであったという。たとえば，反収の増加，面積の拡大（保温折衷苗代の坪数増加，2・4 D使用面積の増大，それらの生産技術導入農家数の増加など）の程度によって評価されたのである。このような意味での技術に偏した人間の本質に即さない普及活動の捉え方に比すれば，Kelsey とHearne の見解，すなわち「変ってきた[4]行動」(changed behavior) こそ成果評定の指標であるとする見解は，そこに人間が認められているようで，普及活動の教育的性格がよく意識されているように思える。勿論，この行動の変化は，知識・技術・態度の三側面での変化であり，経済効果と社会的成果 (economic & social outcomes) を産み出す。従って，反収の増加とか面積の拡大といったことに無縁ではないが，人間を忘れた技術主義や生産至上主義ではない。技術において自己を形成的に自覚するという普及活動の教育的性格は，ここではより正当に認められているといえよう。

普及活動は，以上述べたように，人間の自主性が尊重される民主的方法によって，民主的な科学や技術が学習され，経済的・社会的条件に変化を与えようとする仕事であると考えられる。さて，民主的な

普及方法のさまざまなかたちについて，さらに具体的に考えてみよう。

2．普及方法の三類型

「普及活動[5]には，さまざまな方法（methods）や教える道具（tools）がある。異なった方法や手段を多く使えば使うほどより多くの人々の行動の変化が期待できる。多数人を対象とするときは，所謂 mass media によるのが適当だが，小人数を対象とするときは，集団活動（group activities)がよい。個人的接触（personal contacts）という方法は最も重要で効果も大きいが，時間と労力のかかるのが難点である。普及活動は，個人的接触なくしてはできないけれど，しかし単なるケース・ワークではない。これらの諸方法が適切に用いられ，相互に補い合わねばならない。これらを適切に併せ用いて，興味を覚えさせ，希望を与え，行動を促し，成功の喜びを味わわせることができる」と Cooperative Extension Work の著者達は述べている。彼等によれば普及方法には三つの類型がある。個人的接触を中心とする型，グループ的な学習，そしてマス・メディアによるものである。この三つの類型論は，ウィーブ（G.D.Wiebe）のコミュニケーションの形態論と全く対応する。ウィーブはコミュニケーションを，個人対個人のコミュニケーション[10]（Person to Person Communication），中間的特殊関心的コミュニケーション（Intermediate and Special-interest Communication）およびマス・コミュニケーション（Mass- Communication）の連続的系列と考え，V字型に発展する系列の図式を描く。V字の基点に個人対個人のコミュニケーションを，もっとも拡がったところにマス・コミを，そして中間に特殊関心的コミュニケーションを位置づけ，V字の拡がりの進行とともに非人格化も進行すると考える。まず，普及活動における個人的接触の意味を考えてみよう。

個人的接触

普及活動は単なるケース・ワークではないけれど，個人的接触が極めて大きい働きをすることは明らかである。農民の生活や考え方に深い関心をもち愛情をもつとき，普及員の顔には自ら微笑がただよい，農民の言葉に注意深く耳を傾けるようになるだろう。このような基本的姿勢が適切な知識・技術の伝達，農民の側からいうならば知識・技術の学習を可能にする。個々の農場や家庭を訪ねて指導助言する巡回指導はこのタイプに属し，普及方法として労力は大きく必ずしも能率的でもないが，欠くことのできない方法である。特に次[6]のような場合に，この方法によるときの効果は絶大であるという。

(1) 援助を求められたとき
(2) 農家の主人や主婦と顔見知りになるため
(3) 問題の所在をはっきり把握したいとき
(4) 演示（demonstration）をしようというとき
(5) 農場や家庭でどんな風に実行されたか見たいとき
(6) 協同や参加を勧めるとき
(7) 農業政策やプログラム作製を相談するとき
(8) 実行しようとすることを説明するとき

個々の農家の土壌の質，その他の物質的条件，働き手や家族の状況——その知的水準，積極的か消極的か，偏見の有無，地域における位置などを熟知していなければ効果的な個別指導はむずかしかろう。対象をよく知り友好的ではあるが，目的意識を明確にもっていて，辛棒強く，細心の心遣いの感ぜられる指導でなくてはならない。普及活動が教育活動である限り，このような教育愛に結ばれた人格関係に支えられねばならないだろう。教育愛は，エロスの立場に立って人間を未熟で不完全な過程的なものとみるという態度を包越し，そのままよしとして欠如態のまま肯定するところに生まれる。単に経済効果や社会的成果の大きさのみが問わるべきでなく，その成果への過程における教育的関係，教育愛の体認こそ最大の成果として問わるべきであると考える。知識・技能において農家と普及員との間には格差があるのが当然であろう。この隔てが敬の関係を生むであろう。敬していながら敬遠とならず，敬愛となるところには教育関係が成り立っているのである。両者は信頼によって深く結ばれる。このような農民を信頼し，農民に愛される普及員こそ農民に敬服されまた敬慕される普及員となるであろう。普及活動の権威はそのような人間関係に支えられた技術によって保持され，高められていくであろう。

集会（meetings）とグループ

集会・会議・グループというかたちの普及活動は歴史も古く，有力な方法である。個人的接触，個対個のコミュニケーションでは与えられない集団力学（group dynamics）が働く。この集団の力学が理解され，注意深く，よく行届いた準備のもとに会合がもたれるとき，会合は成功し，経済的・社会的成果をもたらすような行動の変化も期待されるであろう。この集会とかグループというかたちをとった普及活動について考えてみよう。

集会は共同経験（common experience）の場であり，意味を共有する場である。意味を共有する手段としては，印刷物・話言葉がまずあげられる。みんなが共通にする言葉は，共通の問題を協同して解決するきわめて有効な道具である。言葉のほか，共同の行動や演示，視聴覚的な補助手段などが共同経験を成り立たす。ひとたび集会で顔を合せ，言葉をかわし，共同の実践をしていると，個人的には接触していなくても初対面のような気がしないし，ラジオやテレビで見ても最初から親しみを覚え，気易くその指導をうけいれることができる。集会は普及の手順を説明したり，その活動の開始を周知させたり，普及活動を有効に進めるのに有効であるのは申すまでもないが，そのほかに次のような意味をもっている。(7)

(1) 組織（organisation）の価値が学びとれる。

(2) 民主々義を行動で学びとる。

(3) 議事手続きを習得できる。

(4) 集団のなかにあって考えたり話したりする能力を伸ばす。

(5) リーダーシップの能力を訓練できる。

(6) 社会の安定をすすめる。

(7) 問題になっている事柄について情報が得られる。

(8) 隣人と田舎の生活に対する正しい認識が得られる。

このような集会や集団において共同経験を得，本来社会的存在である人間が，その本来性を自覚する

こととなる。この場合，次のような反論が提出されるかも知れない。すなわち，多くの人々とともに考え，多くの人々とともに認めたことが，多数であるが故に常に正しいとはいえまい。集団として共有している意味も誤謬を犯すこるがあろうというのである。この主張は集団を単に静的な (static) 多数と考え，力動的な (dynamic) コミュニケーションの過程のなかで，補足し合い，修正し合い，協同で思考し，より高次の真理に接近しようとしている動く多数であることを忘れているものといえよう。もとより，このように考えられた真理の客観性は相対的であり絶対的真理ではない。より客観的なものに向って再構成されていく過程がすなわち真理と考えられるのである。民主的集団のなかで培われる真理とはそのようなものであろう。それは社会的知性の所産であるといってもよいだろう。自由な communication のある人間関係のなかで，成員のすべてが共同の利害と関心をもち，自主的に協力し，集団的に問題解決するという社会的知性の役割は，普及活動においてもきわめて大である。そこで，自由な communication が可能な人間関係を確保できる集会や集団のあり方が反省されなければならない。力動的な自由な communication の行なわれる集団，社会的知性の育つ集会とはどのような性格をもっているであろうか。

Ralph White[8] と Ronald Lippit は「民主的」「専制的」および「自由放任的」と名付けた三種の社会的雰囲気の変数が，個人および集団の行動にどのような影響を与えるかを調査している。

彼の「専制的」とよぶ社会的風土は次のようなものである。

(1) 一切の方針は指導者が決定する。

(2) 作業の要領と作業の手順は，その都度，ひとつずつ権威的に命令する。従って，それから先の作業の見通しの多くは不明である。

(3) 指導者は通常個々の作業課題を指令し，各成員の作業の相手方も指導者が決める。

(4) 指導者は，各成員の仕事を賞讃したり批判するとき，個人的主観的に行なう傾向がある。実演してみせる場合のほかは，集団の仕事に実際に参加することはない。

「民主的」といわれる社会的風土は次のように説明される。

(1) あらゆる方策は集団によって討議決定される。指導者はこれに激励と援助を与える。

(2) 作業の見通しは，討議の間に得られた集団の目標に達するための全般的な手順の予定が立てられる。技術上の助言が必要なときには，指導者は2つ以上の方法を提示し，その中から選択させる。

(3) 成員は仕事の相手として誰を選んでも自由であり，仕事の分担は集団にまかされる。

(4) 指導者は，賞讃や批判をするに当って，客観的で即事的である。指導者は気持の上では正規の集団成員の立場にあるようにつとめるが，差出がましくならぬよう気をつける。

「自由放任的」と称する社会的風土は次の如くである。

(1) 集団としての決定も，個人的決定も全く放任されていて成員まかせであり，指導者は最少限にしか参加しない。

(2) いろいろな材料は指導者が提供する。また，求められれば情報を与えることを言明しておく。仕事の上の討議でも，これ以外の役割をしない。

(3) 作業には指導者は全く参加しない。

(4) 質問されない限り，指導者は，成員の作業上のことについて自発的に意見を述べることは稀である。そして，作業のやり方を評価したり調整したりすることは全くない。

以上のような社会的風土のなかで，指導者は次のような傾向を見せる。

(a) 最も特徴のあるのは，専制型指導者の言語的行動の45%が，1人の人間の意志を他の人に強要するという命令形であるということである。民主型が3%，自由放任型が4%であるのと好対照をなす。

(b) 集団成員の表明する希望や，現に行なっている行動を遮り，指導者の希望通りにさせようとするぶちこわし的要求が，専制型指導者に11%，民主型，自由放任型には1%またはそれ以下である。

(c) 客観的でない批判，すなわち失敗した理由やもっと上手にやる方法を示唆してやって，改善方向を客観的に示すといったことをしない批判が，専制型指導者に5%，民主型，自由放任型では1%である。賞讃も民主型7%，自由放任型5%に対し，専制型は11%で，前二者より多いが批判・賞讃ともに指導者の立場からの個人的評価が多い。

(d) 指導的な助言が多いのは民主的指導者で24%，専制型ではわずか6%，自由型は14%であった。すなわち民主型は，被指導者に対し不必要な干渉をしないという心遣いをするだけでなく，個々人の立場を尊重し，指導的助言を与えているのである。

(e) 知識を与えるという活動は，民主的指導者で27%，専制型15%，自由放任型49%

(f) 自主性を促進する指導者行動は，民主型16%，専制型1.2%，自由放任型13%と民主型，自由放任型に多いが，両者の行動の意味は異なり，前者が集団全体を教育して，集団としての自分たちの全体に頼ることを学ばせるといったものであるのに対し，後者は個々の成員に責任を負いかぶせる傾向がある。

(g) 民主型を他の2つと明確に区別させる特色は，民主型には，成員と指導者の間に信頼にみちた会話が多いこと，両者が全く平等の立場に立って行動することが多く，自己の地位や威信には全く関心がないような態度をとることが普通であるなどである。

他面，集団の成員の反応は次のようであると述べられている。

(1) 自由放任型は民主型と同じではなかった。

(イ) 自由放任型では，なされた仕事の量も少なく，仕事のできばえもまずい。

(ロ) 遊びが多い。

(ハ) 成員は民主的リーダーの方が好きである。

(2) 民主型は能率的でありうる。

(イ) 専制型の方が作業量は幾分大

(ロ) 作業の動機づけは民主型が強い。

(ハ) 独創性は民主型が大

(3) 専制型は，敵対ならびに攻撃行動を多くつくり出す。

(4) 専制型は，表面に現れない不平不満をつくり出す。

(5) 専制型では依存性の度が大きく，個性の発現度が少い。

(6) 民主型では他と比べ，集団意識の度が大，友好性の度合も大

以上のようなことが，精密な計画のもとに実施された実験の結果，結論として列挙されていることである。この報告は，集会や集団の在り方が民主型であるとき，最も明朗で，能率的で創造的であり得ることを教えているようである。普及活動における諸々の会合・研究会・会議といったものが，民主的に運営されることが望まれる所以である。集会といってもさまざまの目的をもったさまざまな形のものが考えられる。定期的な組織の集会 (orgnaization meeting)，事前打合せのための計画集会 (planning meeting)，特定の主題について訓練する会合 (training meeting)，特殊な興味をもつ者のみが集る同好会 (special-interest-group)，年令，性，職業などまちまちだが地域でつながる地区の集会 (community meeting)，そして演示会 (demonstration) などを，目的によって効果的に活用することが必要である。また集団的に問題を発見し，思考してこれが解決を成し遂げ，宣伝屋はチェックするといった民主的方法に慣れなくてはなるまい。集団的思考のための討論，ソシオドラマ (sociodrama)，役割り劇 (role playing) など行なわれることが望ましいし，集団力学的な分析のための資料を得るためにはソシオメトリー (sociometry) なども用いられてよいであろう。

次に集会の民主的運営のため欠くことのできない討論法 (discussion method) の形態を列挙してみよう。

(1) フォーラム (forum)，古代ローマの集会所における討議形態を模倣したもの，1名ないし数名の演説，それに続く聴者の質問・批判によって全員が参加する。

(2) シンポジュウム (symposium)，古代ギリシャの宴を意味し，元来音楽を聴き，踊り，楽しく語る会であった。従って形態はフォーラムが市会や国会といった格式ばった場所での討議形態を模しているのに対し，シンポジュムは，参加者の集団への帰属性，仲間意識や批判性を養うことを特に意図する場合適当である。

(3) パネルディスカション (panel-discussion) 人数が多すぎて全員が討議に参加できぬ場合，数人の代表者が，聴者にかわって考え，声だけは皆によく聞えるように大きいが，話し合いの雰囲気で討議する。代表が聴者より広い知識や洞察をもっている場合特に有効である。多数参加の討議に於て起りがちな混乱や回り道を避けることができるからである。

(4) ラウンドテーブルとセミナール (round tables and seminars)

各人が自由に発言し，また聞き手となる討論形態，テーマを中心にした思考過程に重点がおかれる。指導者の役割が重大である。開放的な共同討議にありがちなどうどうめぐりを避けるとともに，あまりに指導的になってもいけない。成員の主体的思考に基礎を置きながらこれを高めていかねばならない。セミナールはラウンドテーブルよりは話し手中心であり，クラスの形態をとっている場合によく使われる。両者とも15〜25人程度のメンバーであるのがよいだろう。

その他，賛否の決定に迫られているときに用いる，賛否討論 (agree-disagree discussion)，一週間あるいはそれ以上の期間，継続して構成員が話し合ったり，そのための図書や資料を用意したりするワークショップ (workshop) などがある。

上述のような集会とか集団討議は，比較的教育程度も高く進歩的な人達にふさわしい方法であろう。

特殊関心的コミュニケーション (special-interest communication) の場である集団には，少くとも共通の特殊関心が前提されなければならないからである。それにひきかえ，個人対個人のコミュニケーションは，人格的関係として最も基本的な教育方法であることに相違はないが，むしろ学歴なども低く，収入も少く，啓蒙を要する人達に不可欠の方法であるといえよう。後者のような人達には，また成果の演示 (result demonstration) が有効であると考えられる。

このような集会や集団においても，印刷物すなわち新聞，雑誌，回覧文書などや視聴覚的補助資料 (audiovisual aids) が用いられることが多いが，communication 領域の広い press や television, radio などは，利用度の増大に比例して聴視の主体と客体の人格関係は稀薄になっていき，集団における単なる補助手段にとどまらぬ巨大な機能を果すものとなる。終りに，マスメディアが普及活動において果す教育的役割について簡単に述べる。

マスメディア (mass-media)

ラジオは聴取者に，考えたり，やってみようという気にならせたり，印刷物を読んでみようとか，専門家によく聞いてみようというような気持を起こさせる。テレビは教育の道具である。ラジオは行動に刺激を与えるだけだが，テレビはさらに積極的に教えてくれる道具であると Kelsey[(9)] & Hearne は述べている。なるほどラジオは，少ない費用できわめて多くの人々に伝達できるし，ちょっと交渉をもつことが困難な人々とも communicate できる。このようにして普及員のプログラムに関心をもちつずけさせ，さらに特殊なプログラムを求める気持にならせることもできる。テレビはこのような刺激を与える役割にとどまらず，より具象的な映像を通して教育できるという強みをもっているが，チャンネルを変えれば面白い娯楽物が待ちうけていることを忘れるわけにはいかない。この誘惑に負けない魅力を普及活動に関するテレビ番組が保持するためには，並々ならぬ苦心を要するであろう。楽しみながら見られる普及番組といったものが工夫されねばなるまい。マス・メディアとしては，この他，新聞 (press)，視聴覚補助物 (audio-visual aids) すなわち，写真，幻灯，紙芝居，図表，展示品，ポスターなどと，直接的第一次的経験を得る方法としての演示 (demonstration)，見学などがあるが，これらについては別に機会を得て，それぞれの特徴，教育の観点から見た得失など考えてみたい。

註 (1) 島根農科大学研究報告，13号，B，P.38～39
(2) 下程勇吉編「教育学」1960，有信堂刊，P.158
(3) 竜野得三外編「普及活動の方法」下巻，P.99
(4) Kelsey & Hearne : Cooperative Extension Work, P.126
(5) Ditto, P.261
(6) Ditto, P.429
(7) Ditto, P.406
(8) Edited by Cartright & Zander. : Group Dynamics 1953.のなかの三隅二不二訳編 Ralph white & Ronald Lippit : Leader Behavior and Member Reaction in three "Social climates." P.687～716
(9) Kelsey & Hearn : Ditto P.287
(10) 阪本越郎著　視聴覚教育1960，大日本出版。P.44